



たいしも通信

戦跡シリーズも5回目、今回はいよいよ下関要塞についてです。実家が門司で小さい頃はよく下関に連れてきてもらいましたが、旧軍時代の要塞については秘中の秘、写真はもちろん、観光地図も空白となっていたというのを祖父や父に聞いたことがあります。あまりに有名ですが、逆に全体像が見えてこないのではないのでしょうか。このため今回は初となる明治期の前編と、昭和期の後編の2部に分けてお送りします。

◆要塞建設

明治維新後、敵国艦隊襲来に備えて陸軍による海岸防衛事業が進められ、欧州から軍の専門家を招聘して全国各地の重要港湾・海峡に堡塁(コンクリ製の防御陣地)設置計画が立案、瀬戸内海玄関口である関門海峡にも防御のために「下関要塞」が設置されることとなりました。しかし財政難から建設は進まず、明治天皇からの資金下賜及び富裕層の献金により明治20年、下関要塞初となる田ノ首砲台と田向山砲台の建設が始まりました。

工事中の明治27年に日清戦争開戦。当時はまだ要塞司令部がなく、臨時下関守備隊司令部が組織され、要塞砲兵第四聯隊が既に完成していた10個の砲台で戦闘準備が進められ、翌年4月には下関要塞司令部が下関市内に設けられました。程なくして日清間で講和が成立、戦争は終結しました。

日清戦争勝利後、再び砲台建設が進み、明治33年に19個目となる高蔵山堡塁(北九州市)が完成。その後新たに洞海方面(北九州市)の堡塁や榎舎等追加予定でしたが、明治34年に経費の都合上中止となり、13年間の建設期間において砲台11個、堡塁8個、合計19個が築城されました。

明治37年、日露戦争が始まり下関要塞に緊急配備が下令され、

配置につきました。結果的に本土に攻め込まれることなく翌年には日本の勝利で終わりました。その後、これらの遺構については戦後ほとんどが破壊され、断片的にしか残っていません。

◆明治期の下関要塞その後

【大瀬戸】田ノ首砲台(墓地となり消滅、標石数本が残る)、田向山砲台(公園化されたが砲側庫・観測所・電燈所・発電所等保存)、笹尾山砲台(耕作地となり大半消滅、砲側庫・観測所等残る)、山砲台(山中に砲座・砲側庫・観測所が残る)

【大瀬戸】小瀬戸】老ノ山砲台(地下施設の一部残る、その他観測所等)

【早鞆瀬戸】火ノ山第一、第四砲台(公園化されたが第四砲台主要部は保存、その他第三砲台砲側庫等)、古城山砲台(施設建設・公園化で消滅)、古城山堡塁(掩蔽部と観測所が残る)、門司砲台(消滅)

【下関地区陸正面防衛】金比羅山堡塁(公園化で消滅)、戰場ヶ野堡塁(公園化で消滅、標石やコンクリート杭のみ残る)、一里山堡塁(公園化で消滅、標石のみ残る)、龍司山堡塁(公園化で大半は破壊、掩蔽部や堡塁壁が残る)

【企救半島】富野堡塁(施設建設で大半破壊、掩蔽部残る)、矢筈山堡塁(キャンプ場となるが遺構が残される)、高蔵山堡塁(山中に現存、下関要塞の中で最も当時の姿を留める)

▼編集後記▲

現在は海峡防備という観点から、日本の主要な海峡は海上自衛隊の管轄となっていますが、当時は海峡・島嶼等は陸軍の管轄でした。また、下関要塞には北九州エリアも含まれています。次回の後編は大正から昭和における変遷を扱います。

例によって、内容に関する責任は全て支部長にあり、特に規則等に定めてあるもの以外は私の個人的見解が色濃く反映されていますので、ご意見等ございましたら遠慮なくお知らせ下さい。